

伝統的木造住宅の住育の力と歴史的建造物の保存継承 (2007. 7. 1)

大阪大学名誉教授 畑田耕一

大阪府教育委員会文化財保護課主査 林義久

1. はじめに	1
2. 建物が持つ潜在的教育力すなわち住育の力	2
2.1 伝統的木造住宅に潜む住育の力	2
2.2 学校建築と住育	2
3. 伝統的木造住宅における教育・文化活動	3
4. 伝統的木造住宅が持つ住育の力の検証	5
4.1 木の家の温かさ	5
4.2 伝統的木造住宅と音の響き	5
4.3 同じ目線で学ぶことの出来る学びの場	6
4.4 日本住宅の開放性と柔軟性	6
4.5 家は歴史の学び舎であり教師でもある	7
5. 家は知恵の宝庫、工夫する心の根源	8
6. 「勿体ない」の心と伝統的木造住宅	8
7. 小学生の文化力を高めよう	9
7.1 小学校での文化財教育の推進	9
7.2 小学校への出前授業の進め	11
7.3 伝統的木造住宅での小学校教育の支援	12
7.4 科学技術の進歩と住育	13
8. 終わりに	13
9. 参考文献	15

1. はじめに

英国の宰相チャーチルは「人は家をつくり、家は人をつくる」と言い、また、陶工、加藤唐九郎は「文化を語る人は素養として建築を学ばねばならない」と言ったという(1)。人は自らを取り巻く様々な環境条件の中で体得した知識、技術、文化・風習などを基にして、いろいろな工夫をしながらその土地や時代に即した建築を作り上げる。したがって、建築は作られたときから独自の文化を担っている。それを使用し、住まいする人達はその建築に文化を感じつつ、さらに異なる、あるいは、新しい文化を付け加えていく。使用する人の必要性、考えや工夫によって加えられた大小の改造や住宅における家具もまた文化を担う建築の一部である。住宅においては柱やふすまの瑕や落書きさえもその住宅で生活してきた人々の歴史の証である。建築は住まいし、生活するところであると同時に、人間の歴史を学ぶ最も身近な教材でもある。教育の主たる目的が文化の伝承であるならば、歴史の学習が重要であることは間違いない。建築はまさに歴史・文化を学び、それを伝承・発展させるための教材である。限りある人の命を超えて文化を伝承する文化財であることも忘れてはならない。筆者らは以前から人間が生きていくための3大要件、衣・食・住の中の一つである住について、伝統的木造日本住宅が人間形成と文化伝承のための教育の場として大変重要な空間であることを述べてきた(2,3)。本稿では、文化遺産(文化財)としての建築の中で、特に伝統的木造日本住宅を中心に

教育との関連についてさらに詳細に考察してみたい。

2. 建物が持つ潜在的教育力すなわち住育の力

2.1 伝統的木造住宅に潜む住育の力

韓国からの留学生の金 明珉さんが、日本に来て半年ぐらい経ったときに、明治初期に建てられた畑田家を訪れたときの「座敷の障子を通るやわらかで温かい光、障子の透き間から見える庭のたたずまい、逆に庭から垣間見る座敷の中の人々の気配などに自国の精神風土に類似するものを感じ、心のやすらぎを覚え、日本に来て初めて日本人の心を感じ取ることができ、あまり気の進まなかった日本食も食べられるようになった」という感想(4)は、現在の日本人が忘れかけている伝統的な日本の住宅の良き一面を再認識させてくれるとともに、古い日本住宅が果たす文化伝承の場としての性格を見事に言い表している。彼女は日本に来てから畑田家に来るまで、ずっとアパートに引きこもっていたわけではない。大阪大学の学生として日本社会の中で生活し、学び、大学の教員・学生はじめ何人も日本人に会い、大阪以外のいくつかの街も訪れ、博物館などへも足を運んでいた。それにもかかわらず、よく分からなかった日本人の心を、畑田家に来てわずか数時間で理解できたという事実は注目に値する。長い間、人が生活してきた古い伝統的木造住宅の文化伝承の底力、すなわち住育の力の大きさを見せつけられた思いである。同時にまた、現在のわれわれを取り巻く住環境から他国の人々が日本人の心を見つけ出すことが困難になっているのではないかという疑念も湧く。日本の伝統を受け継ぐ古い建築物を高く評価して使い続けることの大切さと、それらを後世に引き継ぐことの大きな意義が理解できる。住居の持つ教育力の活用、あるいは建築を通しての教育、すなわち「住育」の大切さをここで強調しておきたい。

2.2 学校建築と住育

教室をはじめとする学校の建築やキャンパスも文化伝承の場であることは論を俟たない。ところが、今の日本の学校教育ではこのようなことは殆ど配慮されていない。日本の古い大学を他国のそれと比較してみても、そのことは明らかである。数百年の歴史に囲まれた教場での授業と、学校経営を目的として収容人員の確保と情報機器などの機能を取り入れることのみを考慮して作られた、大規模な箱のような教室での授業とではおのずと教育の効果が違うはずである。また、最も歴史を重んじなければならない大学において、博物館や美術館もなく、各分野史の講座すら存在しないという大学があまりにも多すぎる。

そんな中で、たとえば、奈良女子大学では重要文化財旧本館の中で授業や学会が行われている。文化財がキャンパスの中で力強く生き続けている。同大学の卒業生が社会で際立った活躍をしていることと無関係ではないように思えてくる。その卒業生で現在同窓会会長の緒方淳子氏の次の文章(5)は、住育の場としての教室の重要性を見事に言い表している。「良い先生に巡り合うことの次に、重要な事は、学ぶ場所、教育環境ではないでしょうか。新しい建物でも、金属とコンクリートの無機質ばかりでは、たとえピカピカであっても心が満たされない。窓の外に緑の葉をいっぱいつけた樹木も見えれば、つい眼がそこへ向くでしょう。私は、古都奈良にある奈良女子大学を卒業しました。奈良は文化遺産にも自然にも恵まれた所です。2009年に創立100周年を迎える大学ですが、創立当時の建物が残っています。正門を入り守衛室に声をかけ、正面を見ると、木造の凝った造りの2階建てが見えます。記



重要文化財奈良女子大学旧本館（記念館）

念館です。正門、守衛室、記念館共に重要文化財なのです。薄緑に彩色されていてキャンパス内の木々とよく調和しています。100年近く、同じ風景なのです。記念館の2階は講堂になっていて、奈良女子高等師範学校として創立された当時の厳肅な雰囲気味わうことができます。学会などで訪れられた国の内外の方々も使用されていて、心地良い忘れ難い印象を持たれるようです。私が学んだ化学棟は、木造の平屋でした。先生がたの講義、学生同士の交流、一日籠っていた実験室、昨日のここのように心ゆくまで学んだ日々が甦ります。校庭を逍遥する奈良公園の鹿や、木陰を作る木々と共に。今、コンクリートの新化学棟を訪れても感懐はありません。」

3. 伝統的木造住宅における教育・文化活動

現在の学校建築は、小学校から大学まで殆ど全てが鉄筋コンクリート建てとなってしまう。勿論、鉄筋コンクリート建築を全面否定するつもりはない。ここではモダニズム様式の中で機能性のみを重視した箱のような鉄筋コンクリート建築（6）に限定しておく。学校が鉄筋コンクリートになっただけではない。子供や学生の住む住宅もまたかなりの部分が鉄筋コンクリートなのである。家と学校をつなぐ道は舗装道路で子供たちが木や土に触れる機会は少ない。小学校の出前授業で「木の家に住んでいる人は」と聞いて、誰も手を上げないこともある。木の家が子供たちからはるかに遠い存在になってしまっている。こんなときに、古い木造住宅の中で行われている教育・文化活動の意義は大きい。たとえば、登録文化財畑田家住宅活用保存会は、たとえ漠然とではあっても将来のことを考えはじめの小学校高学年から高校の生徒を対象として、いろいろな分野の世界一流の専門家との対話と学習を通して、将来の道を見つけるきっかけをつかんで貰うことを目的として、畑田塾を開催している（7）。参加した子供達は、畳敷きの部屋でその道の専門家から親しくお話を聞いて、これまで知らなかった分野、考えてもみなかったことへの関心を呼び起こされる。普通の家の中で話しを聞くことで、その先生を身近に感じることが出来て、互いに心の通った良い集まりとなる。また、こわごわ、つし二階に登ったり、床の下にもぐったりして家の中を探検し、あちこちに無造作に置かれた昔の生活用具や、どの様に使われていたのかよく分からない中二階の小部屋などを見て、この家に暮らしてきた人々の生活様式や風習に思いを馳せ、自分達とは違う時代に生きた人々の歴史と文化を感じ取っていく。ここで、再び、上記の緒方淳子氏が畑田塾を伝統的木造住宅の中で行うことの意義を述べた文章（5）を引用させていただく。

「江戸時代に原形があり、明治に再建された庄屋屋敷で、

長屋門をくぐり、母屋に入って井戸や厠を横に見て母屋に入り、土間に立って見上げると、立派な梁がつつやと光り、つし二階も端が少し見えて、昔からの道具類が収まっているらしいとわかる。床も高く、縁の下にも入れそう、土間の端に置いてあるあれは何に使うものかな、畳の部屋の向こうはどんな部屋が続いているのかな、奥深そう、二階にはどこから登るのかな、たちまち子供たちの好奇心は刺激されます。この家に住んでいた昔の人はどんな生活をしていたのだろう、あの庭の向こうの建物で何をしていたのかな・・・と際限なく興味と関心は広がります。そうして漠然と歴史と文化の香りを感じて畳に行儀よく座って講義を聴く。子供の後ろや横にいるお父さんやお母さんと、家に帰ってからの話題は尽きないこと



畑田塾でのノーベル化学賞受賞白川英樹先生の電気を通すプラスチックのお話

でしょう。なにしろ畑田塾は登録有形文化財を教室にしているのです。なんと贅沢な塾でありますこと

か。」

畑田家住宅活用保存会と同様な活動は、たとえば、大阪府泉南市の登録文化財山田家住宅（８、９）や泉佐野市の市指定文化財旧新川家住宅（１０）でも活発に行われている。山田家では、登録文化財に登録すると同時に、保存しながら活用し、町の活性化にも活かしたいとの思いから、地元市民の有志の協力を得て「登録文化財山田家住宅保存活用協議会」を発足させ、会の主催で毎月第４日曜日を公開日とし、展覧会やコンサート等を開催している。また、米蔵が民俗資料館として公開されており、昔の機具を使ったむしろ作りなどのイベントも計画されている。一方、旧新川家住宅は現在泉佐野市の指定文化財で泉佐野ふるさと町屋館として一般公開されている。また、月１回の朝市のほか、いろいろな展示会などがここを拠点として活動する NPO「泉州佐野にぎわい本舗」により行われている。いずれも指定や登録の文化財の住宅を活用した生涯教育である。



山田家でのハワイアンの演奏会

堺市にある登録文化財山家住宅でのナヤマミュージアムの活動は異色で、精彩を放っている（１１）。この活動は、登録文化財に登録された後、いろいろな文化活動を行う中で、近隣の主婦から「建物は所有者の物でも、この建物が構成する歴史景観はみんなのものだから、この家を是非のこして欲しい。私たちにも何かお手伝いできることはないですか？」という一声から始まった。まず、埃だらけの納屋や外蔵の掃除を鼻の穴まで真っ黒にしながら始め、先人の生活に思いを馳せながら当時の生活がしのばれる農具や生活用具など実際に手に取り、ボロボロの行灯は紙を張り替えて補修し、へつついさん(竈)で、伝統食の茶粥を炊いて、昔の什器に盛りつけたりして、月２回みなで楽しんできたという。

それを発展させたのが、２００４年から本格的に始められた「ナヤ・ミュージアム」づくりである。堺市の博物館での仕事の経験もある中井正弘氏の企画と指導で、見るだけではなく、「作って楽しいミュージアム」の活動が開始された。現在、様々な職業の人、主婦、学生など大人から子供まで、みんなが作り手になって、納屋、門長屋、外蔵をミュージアムとして活用していこうとしている。文字通り「納屋」を使っていることと、中世の堺の繁栄を支えた「納屋衆」の自治の心意気で作っていかうということで「ナヤ・ミュージアム」と名づけられた。展示テーマには①須恵器の里 ②近世～近代の農業と生活 ③大美野田園都市開発と西野文化村 ④泉北ニュータウン開発 ⑤陶器川流域の自然と環境の５つが設定されている。ミュージアム活動には、展示計画や資料台帳作りだけではなく、雑祭りや葎戸(よしど)の入れ替えなどの年中行事、土壁塗りやその上に張る焼き板作り、土間の三和土(たたき)作り、大工仕事までを含んでいるのがこのミュージアムの特徴である。また、精華高校環境福祉コースの清掃ボランティアの受け入れや、府立堺東高校の「堺学」および探求講座「ミュージアムを作ろう！」の授



ナヤ・ミュージアムでの土壁塗り

業にも協力しているという。古民家を教場として実践的な住育を行う意欲的な取り組みの好例である。

愛知県岡崎市の吉村医院では、古い茅葺き農家を移築した建物を妊婦の自然分娩のためのトレーニングに使っている。この建物は妊婦の緊張を解くのに非常に効果がある。陣痛を感じて病院を訪れる妊婦は近代的な分娩室に入ると陣痛がやむことが多いのに、この建物では逆に陣痛が起きる。20年ほど前から、この建物で自然分娩の準備のための拭き掃除、薪割、井戸からの水汲みなど各種の作業、自分たちがかまどで炊いたご飯を食べる昼食、ミーティングなどが行われている。期間は、普通の妊婦が1週間前から、逆子や難産の傾向のある妊婦は1ヶ月ほど前からと、妊婦によって異なる。このトレーニングの結果、帝王切開はほとんどなくなったという。自律神経系のうちの交感神経が緊張すると陣痛が止まるが、逆に副交感神経が緊張すると陣痛が促進される。古い木造民家でのトレーニングはそのような効果を示すと考えられている(12、13)。

4. 伝統的木造住宅が持つ住育の力の検証

4.1 木の家の温かさ

畑田家では畑田塾のほか文化フォーラムも開催している。参加者のアンケートを見ると、落ち着いていて慌ただしさがなく、和やかで温かい雰囲気の中、ゆったりと、ほっこりした気持ちで話が聞けたという意見が圧倒的に多い。「木造住宅には、日本人が昔から住み継いできた暖かさがあります。現在の住宅は軽薄で落ち着きのないもので、ゆっくり物事を考えたり、集中して事を行うことが難しくなっています。日本の古い住宅の持つ自然の変化に対する寛容さが住みやすさの原点だと思います」という意見は、自然と共生する古い日本家屋の性格とその人格形成能力を上手に言い表している。

「古い住宅で日本の文化が詰まった部屋で座ってお話を聴くことは現在では非常に少ない。寺子屋のような感じでじっくり落ち着けるように思います。文化財の家屋とお話とが非常によく合っていると思います」というのが参加者の偽らざる心境であろう。

和やかで温かい雰囲気を醸し出す構造的特徴として、高い天井、土壁、部屋から外を眺めたときに、ひさしの下に視界を遮るものが殆ど無く庭の見える構造が指摘されている。「天井が高いので長時間話を聞いていてもいららない」、「今ではこの様な土壁と木のぬくもりを感じる建物で学習する機会がないので貴重です。昔を懐かしく思い出します」などがそれである。また、ここに述べられている庭の見渡せる部屋の効果の指摘は重要である。「学校の建物は、片側は廊下であっても、もう一方は景色であるべき。最近、そういう教室が減った」という意見は、ふっと一息入れたときに景色も見えないという安らぎの無い学校教室が増えたという教育上の最近の問題点を、畑田家住宅の活動に参加して気付いて頂けたということを示しており、これも古民家のもつ住育の力といえる。

4.2 伝統的木造住宅と音の響き

畑田家で演奏会を行った関西二期会所属のソプラノ歌手畑田弘美さんの次の言葉(14)は古い伝統的木造住宅の構造と音の響きとの関連を見事に言い表している。「日頃会話を交わすときには、体全体を震わせて声を出すようなことはしません。しかし歌唱する場合は、息の流れを良くし、声帯の振動を体全体に伝えて、広い空間に声を送り出すためのエネルギーをいかに効率よく使うかを考えます。歌を歌う空間のことを考えてみますと、通常の木造住宅には音を吸収する素材が多いのに対して、ヨーロッパの建築、とりわけ教会は、天井の中心は非常に高く、大きく、石造りで、最小限の喉の負担で豊かに共鳴してくれます。ホールが豊かな音で満たされるのです。畑田家住宅は伝統的な木造木造住宅ですが、天井は高く、100年以上の歳月を経て固くなった大きな柱、梁や鴨居などでできた木組み、室内の広い平面と外の広いお庭など、美しい音楽を生み出す条件が揃っているのです。広い庭は歌い手が視線を遠くに向けて歌声を響かせるのに役立ちます。このような場で演奏を聴いて頂くことにより、空気の共鳴

を体感し、息づかいを聴き、美しいメロディーに心が動かされるのだと思います。最近、日常生活の中に電子音が溢れ、音のない静寂を味わう機会が少なくなりました。このような時代だからこそ『人間の声』の素晴らしさや、生演奏の音色の美しさに触れて頂く機会を作り続けていきたいと思うのです。木は伐採した後も息づき、成長を続けるといいます。その強度が一番大きくなる年数は200年と聞きます。畑田家住宅を作っている木の生長もまだまだ楽しみです。ここに多くの方々が集い、その人達によってこの家が美しく生かされていくために、微力ではございますが少しでもお手伝いできればと思っています」古い日本の木造住宅は音楽ホールとしての機能も備えているのである。また、ここでも、4.1節で述べたのと同様に、庭の見渡せる部屋の効果が指摘されていることは心に留めねばなるまい。

4.3 同じ目線で学ぶことの出来る学びの場

畳の部屋は椅子生活になれた現代人には多少の苦痛を伴い、快適とは言いがたい面がある。しかし、学びの場としての畳の部屋の寺子屋的な雰囲気の良いさを指摘する声は多い。「先生との距離が手を伸ばせば届くようなところなので、いつも楽しみに聞けています。車座を囲むような雰囲気は、他の場所ではなかなか望めません」、「椅子席でなくて、最初は辛く感じましたが、座布団に座って庭を見ながらの講座は先生との距離が短く(物理的だけでなく)、雰囲気が大変よく、お話が身近に感じられて大変よかったです」、「膝を交える形で話を聞くと、難しい問題もすんなり入ってくる」、「ある講師が部屋に入って来た時に驚いた様子をされたように、聞き手が迫ってくるようだ。講師と客の間に一体感があり、お寺で話を聞いているようで大変いい席である」、「現代版寺子屋であると思います。古い住宅で、同じ座敷を囲んで、同じ目線で学ぶということは意義がある」などである。この、「同じ目線で学ぶことの出来る学びの場」の指摘は重要である。学生や生徒の数が数十人の教室では、教員が立って教えるのと、座って教えるのでずいぶん教育効果が違うことを、教員生活が40年を超える筆者の一人(KH)もよく経験するところである。畳の部屋と庭の眺望の織りなす教育効果を見落としてはならない。

4.4 日本住宅の開放性と柔軟性

古い日本住宅における畳の部屋は通常は障子やふすまで仕切られていて、個室にもなるし、仕切りを外して多人数が集まる大広間として使うことも出来る。柔軟性と開放性という日本住宅の持つ大きな特徴の一つである。この場合の個室は現在の日本住宅の洋式の個室とは異なり密室にはなりえない。子供の社会性を育てる格好の場ともいえる。この様な住育の場が少なくなったことが子供の学校教育を難しくしているというのは言い過ぎであろうか。次に記したフォーラム参加者の感想はこの様な事情を見事に言い表している。「落ち着き、重厚感をまず感じます。頑丈さと、天井の高さと、部屋の仕切りの柔軟性などが、この家は家族全体のために作られた居住空間で、単なる個々の部屋の集まりではないということを教えてください」、「畑田家は襖を開ければ隣の部屋につながり、開放感と家族の絆を結び易い場であるが、現在の一般住宅は個の尊重(個室)から、家族間の交流が少ない構造になっている」

われわれは、先に、現在の日本の住宅はシェルターのように外部に閉ざし、自分たちの空間の快適性を求めて地域・近隣とは隔絶し、個人的満足度のみを高めようとしており、古い日本住宅が豊かな自然とともに、外部空間(自然や地域社会)と開放的に一体化してきた伝統文化が失われ、住空間が極めて個人的、閉塞的なものになっていることを指摘した(3)。

このような傾向は個人住宅の一部にもあるし、最近人気の都市部の高層マンションにもいえるのではなからうか。また、たとえ低層であってもマンション等は、ドアを閉めてしまえば「となりは何をする人ぞ」であり、全く隣人を意識しない場合が想定される。まして、地上40階、50階というような超高層のマンションになると、より孤立感は大いいではなからうか。晴れた日の眺望は素晴らしいかもしれないが、一日中外を眺めている訳でもなく、下から見上げると、天候によっては、高層部分は雲の

中に包まれており、風が強ければ春・秋のすがすがしい気候を肌で感じるために窓を開けようとしても窓は開けられず、電気を使った強制換気に頼らざるをえない。このような住環境を優れたものといえるであろうか。

建築の世界は、地域社会と隔絶して個人的で閉鎖的な空間ともいえる住宅をつくりだすと同時に、モダニズム建築の流れの中で、事務所建築を中心に、それがあたかも文明の象徴であると主張しているような、強く、他を威圧し圧倒するかのような鉄骨や鉄筋コンクリートのビル景観をつくりだし、経済資本に裏打ちされて勝ち誇ったような建築の姿を見せつけてきた。それは今も継続しているが、最近では、その行き詰まりを説く建築論もある（15）。

自然に立ち向かいこれを制御するためにエネルギーを使うというような「勿体無い」ことはせずに、せめて住居だけでも自然や地域とうまく共生していけるものにすることが必要である。「各地の伝統的住宅を、赤ちゃんから老人までが集まれる地域社会の交流の場、日本人の大切さを感じることの出来る場にできればと思う。地域にもっと触れ合いの場がほしい」という意見は、長年多くの人によって住み継がれてきた伝統的木造住宅が人間に与えることの出来る開放性や社会性育成能力が、今求められていることを示している。

4. 5 建築は歴史の学び舎であり教師でもある

冒頭でも述べたように、教育の主たる目的が国の文化の伝承であるならば、歴史の学習が重要であることは間違いない。未来の創造は歴史を深く考えることから始まる。古い建築は、その外観・内部とも長年使用し其処に住んできた多くの人達の生活・風習・文化を現在・未来に伝える場である。まさに、歴史・文化を学び、それを伝承・発展させるための教室であり教師であるといえる。たとえば、戦争で破壊されたワルシャワの旧市街を復興するときに、古い記録をもとに建物外壁のタイルの傷の一つまでを正確に復元したのは、歴史の学び舎としての古い建物の重要性が市民の多くによく理解されていたからであろう。衣食住のうちで、住である建築が一番歴史を後世に伝える力が強いと思われる。われわれが住育の重要性を主張する理由はそこにある。「衣食住のうちで住が最も先祖の生き方を残していると思う。畑田家住宅の住空間に1～2時間を過ごすことによって、若者は日本の先人（祖先）の生活態度を有意義に感じとることができる」、「伝統的な日本住宅にはその時代の人の動きが残っていると思う。この動きこそが、日本人固有の礼節や躰（しつけ）の確認にもつながると思う」、「畑田家住宅では、常に時間軸がそばにあり、じっくり考える場になると思う」などの意見は、畑田家住宅での文化活動への参加者が、伝統的木造建築の歴史の学び舎としての重要性をしっかりと認識されていることを示しており、古民家の持つ教育力をひしと感じ取ることが出来る。

「和を感じ、日本を感じて学びを得られる。学びの吸収が良いと直感で思う」という意見は、日本人の歴史を伝える伝統的木造建築が、今を生きる日本人の精神活動を活性化する力を持った教場であり住育の場であることを物語っている。大阪府だけのデータではあるが、昭和30年代以降の登録文化財の建物は非常に少ない（16）。これは昭和の建物はまだ築後50年以上経っているものは少ないという理由だけによるものではなく、機能主義の立場から建物を単なる雨露をしのぐ箱、場合によっては消耗品とさえ考えかねない戦後の風潮と無関係ではなからう。われわれが、今やらねばならないことは、単に現



東京丸の内のビル建築群

存する伝統的日本建築を保存・活用するだけでなく、われわれの現在の文化を担いそれを未来に伝えることの出来る建築、将来の文化財になりうる建築を作り、活用保存していくことであろう。100年先になって建築としての平成の歴史遺産は皆無に近いというようなことになっては将来の子孫に対して申し訳ないと思う。

5. 家は知恵の宝庫、工夫する心の根源

古い住宅には、そこに住んできたいろいろな人の工夫と匠の知恵が詰まっている。勿論、現在の家には便利さや快適さを求める先端的な科学・技術の成果がふんだんに応用されている。ただ、先端的な技術成果は得てして人間の考える力を失わせるのに対して、古い住宅が宿しているものは、工夫する心の根源的なものであり、人間の知恵の源ともいえる。農家の田の字型の四間取り平面はふすまを外せば大広間となり、社交の場に変身する。長く張り出した軒のひさしは、暑い夏は太陽光を遮るが、冬は日の光を取り入れてくれる。雨の時にはひさしの下が作業場となるし、その軒下は鯉のぼりの竿など長いものの保管場所にも利用される。蔵の入り口のねずみ返しはねずみの習性を詳しく観察したうえでの素晴らしい工夫である。竿秤(さおばかり)は槌子(てこ)の原理の応用であるし、蠟燭を使う懐中電灯ともいえる「がんどう」をよく見れば、物理と化学の基礎が詰まっていることが分かる。古い日本住宅の「へつついさん」いわゆる竈には、鍋の大きさに合わせて、いろいろな大きさの輪を重ねて置けるようになっていて、どんな大きさの鍋も使えるように工夫されていることや、「火消しツボ」などのいろいろな工夫がある。竈を築く左官屋さんの技術の上手、下手で竈の燃焼効率がずいぶん違ったとも聞く。竈を子供が使うといろいろな工夫が楽しめることをご存知の方も居られると思う。竈の煙を家の殺虫・防虫剤に利用する工夫は良く知られていることである。伝統的日本住宅の工法にも素晴らしい工夫が一杯ある(17、18)。昔は大工さんの仕事を学校から帰った子供が日の暮れるまでじっと見つめていることがよくあった。子供はそれによって大工の手技だけでなく、大工の心をも学び取ることが出来た。この様なことが子供の創造する力の育成に役立っていたことを、われわれは心に刻んでおく必要がある。

6. 「勿体ない」の心と家

前章でも少し触れたが、竈での薪の燃えかすは火消しツボで空気を遮断して消し、「カラ消し」とする。これは、いわば発泡木炭のようなもので、大変火がつき易く、七輪で一寸煮炊きをするときの燃料や、火鉢の炭の火起こしにも重宝する。見事な生活の工夫である。また、この「カラ消し」は使えるものは絶対に捨てない、生かして使うという「勿体ない」の心の現れの一つでもある。水洗トイレは確かに衛生的であるが、昔の汲み取り式の便所はいろいろな点で「勿体ない」の心に満ちていたことも事実である。

屋根の葺き替えをするときに、昔は、古い瓦を丁寧に降ろして、屋根の下地などを修理した後、もう一度古い瓦を再利用して葺くのが原則であった。そのとき、割れたり、傷んだりした瓦を差し替える必要があるのも、新しく屋根を葺いたときには、屋根の大きさに応じて、適当な枚数の瓦を差し替え用に保存するのが常であった。全く同じ瓦を作るのは難しいので、新しい瓦を差し替えに使うと、台風のとときにそこから飛んだり、雨もりの原因になったりする。差し替え用の瓦を保存するという一寸した工夫で100年以上も同じ瓦が使える。畑田家住宅では築後110年目の葺き替えのとき、この差し替え用の瓦がなくなって新しい瓦にしたが、最近では30年程度使った瓦を平気で捨てている。勿体無くて涙が出る。また、環境汚染の原因にもなる。南の島の沖縄では台風に見舞われることが多いので、最近では鉄筋コンクリートの住宅が増えたが、瓦葺の木造家屋もかなり残っている。屋根瓦は台風に備えて漆喰で塗り固められているので、上記のような資材節約・環境調和型の屋根の葺き替えには漆喰を丁寧に洗い流す必要があり、一段と手数がかかる。それでも差し替え

用の瓦が大切に保存されていて、この昔型の葺き替えが行われている(17、18)。

「建設工事に係わる資材の再資源化等に関する法律（建設リサイクル法）」が、建築廃材の再資源化と建築廃材による環境汚染の防止を目的として、2002年5月に施行された。住宅の解体を、重機を使ってぐちゃぐちゃに壊すいわゆる「ミンチ解体」をやると、その住宅に使われていた材料は、瓦も含めて全てごみとなる。勿体無いことこの上ない。貴重な資源がどんどん無くなっていくし、産業廃棄物が環境を汚染する。日本の伝統的木造建築の骨組みは、戦後の高度経済成長期に大量生産された木造建築とは異なり部材も比較的太く、釘は殆ど使わずに継手と仕口によって組み立てられている。丁寧に分解すれば多くの材料を再利用することが出来る（17、18）。

富山県の国際職芸学院の敷地内で、早稲田大学の尾島俊雄教授が木造二階建て9室77坪の住宅を日本古来の建築手法で建て、数年間人が住んだ後、解体して別の場所に移築して再び住居にするという繰り返し実験に取り組んでおられる。解体移築の際、壁土も含めて全資材の95%が再利用できるという。日本古来の家の建て方がいかに優れたものかを物語っている（19）。畑田家住宅でも、築後120年をこえた現在の家を建てるときに解体した前の家の部材が今も保存されていて家の修理に使っている。

アフリカの植林活動「グリーンベルト運動」でノーベル平和賞他を受賞したケニアの女性環境保護活動家で、ケニア副環境大臣のワンガリ・マータイ博士は、昨年来日した際、欧米にはない「MOTTA INAI」という言葉に感銘を受けて世界に広めることを決意し、環境保護の合言葉として国連でも紹介されたという（20）。田中耕一博士のノーベル化学賞受賞の対象となった研究は、試料を分散する時に使う有機溶媒を間違え、それを「勿体ない」と捨てずに実験に使ったことがきっかけになったという話もある（21）。「勿体ない」もいま次第に国際的になりつつある。

少し話は変わるが、上に引用した「古い日本住宅に見られる生活の工夫」のpdf版（17）は2006年5月22日Web公開以来、アクセス数が2007年6月16日現在で3209であるが、その英語版「Ingenious Ideas Seen in Ancient Japanese Homes」（18）のアクセス数は5837である。「勿体ない」とともに伝統的日本住宅も国際的に関心と呼びつつあることは間違いない。そこに宿る日本人の心の理解へと進むことを期待している。

ところで、この「勿体無い」の心は、日本古来の生活を貫く基本的精神のひとつである。上記の「勿体無い」はそのものの価値を生かさず捨てるのは惜しいという意味であるが、過分のことで畏れ多い、かたじけない、ありがたいという意味もあり、「自然」も含めて自分以外の存在を敬愛し共生するという日本人の心・精神作用の重要な部分を表す言葉でもある。古い日本住宅に育った子供たちは、夕餉の竈の世話などを通して日本人の心を実体験として修得していったのである。「人は家をつくり、家は人を作る」という言葉（1）のとおり、古い日本住宅はまさに日本文化を子供たちに伝え、文化創造の力を賦与する道場の役割を果たしていたといえる。

7. 小学生の文化力を高めよう

7.1 小学校での文化財教育の推進

われわれは先に文化財についての教育を小学校で行うことの意味と必要性を説いた（22）。ところで、文部科学省の前身である文部省は、平成11年に「文化や伝統を大切に作る心を育てる」と題する道徳教育の手引き書を各学校に配布している（23）。ここでは道徳教育推進の教材として伝統文化が取り上げられている。伝統文化を理解し尊重することは、国際社会における日本人としての豊かな人間性を育むことであり、広い意味の道徳に深く関わることである。道徳教育という言葉に、昔の修身教育を

思い出してアレルギーを感じる人も、伝統文化の理解と尊重には賛同して頂けるものと思う。

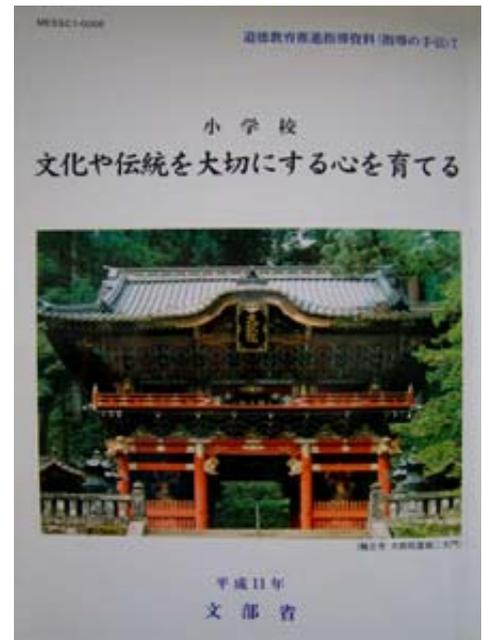
この手引き書の第1章には、「豊かな人間性とは、・・・、人間らしい心を表す道徳性そのものでもあるということが出来る」とし、「人間らしさの最も基本となる道徳的価値を大切に、道徳的心情や判断力等を養うことは、どのような時代が来ようとも、いかなる社会が到来しようとも、変わらぬものとして大切にされなければならない。それは、“生きる力”の根底を支えるものであるということが出来る」と書かれている。また、「文化や伝統を大切にする心を育てる教育の推進は、我が国の文化や伝統を大切にする態度を養うとともに、諸外国の文化や伝統を理解し尊重する心を育てるものなのである」とも述べられている。さらに、「文化や伝統は、古い過去のものであり、大事なものは現在だと考える人もいる。しかし、文化や伝統を大切にすることは、決して過去に向かっていてのではない。重要なことは、目にみえないものを思う想像力である」、「文化や伝統を考えることは、目にみえない人間関係の重要性を考えることでもある」としたうえで、文化や伝統を大切にする心を育てる

際に地域の人々との協力体制が不可欠であると記している。また、「伝統文化の保存や継承に携わっている人々は、保存・継承という観点からの指導を重視される場合がある。そうすると、文化や伝統を大切にする心を育てる教育が、伝統文化を単に継承するためのものということになりかねない。子どもたちが伝統文化を学ぶことによって、豊かな感性や想像力を育て、自分たちで文化や伝統を発展させていこうとする意欲を育てることが大切なのである。」と述べている。逐一同感するところである。

現在の小学校の3・4年の教科書では、上記の指導の手引きの理念に呼応して、「むかしの暮らし」、「地域の発展」、「地域の発展につくした人々」などのテーマで、伝統的な日本住宅での生活道具やくらしを説明し、大阪では、幕末期に活躍した蘭学者の緒方洪庵(適塾)の紹介を行っている。また、天神祭りや文楽といった伝統芸能の紹介も行われている。5・6年の高学年になると授業の内容は地域エリアから日本全体・世界におよび、中学・高校での歴史の授業につないでいる。

伝統的な日本住宅の台所の土間空間や、かまど、その他の道具類などは、現在も登録文化財住宅などの中にのこされていることが多いので、小学校の「むかしの暮らし」の授業などで古い民家を訪れた小学生は実物に触れることが出来る。また、ただ単に昔の道具に触れるだけではなく、最近の新しい家には無い「何か」を感じ取っていく。子供のときに見聞きしたことは、たとえ意味が分からなくてもその内容は強く脳裏に焼き付けられ、年を重ねるにつれて経験したことの意味や根本原理・哲学が分かってくるものである。市民に登録文化財制度の意味と必要性を理解・認識していただくための種は小学校で撒くのが一番である。それによって、将来だけではなく、現在の子供の保護者や地域社会の人たちの関心をひき、理解・認識を深めることになる。小学校の教育はPTAを通して保護者・地域社会とも密接に繋がっているからである。

市場経済の競争原理は消費者の購買意欲をそそるために、様々に工夫を凝らしたカラフルな消費財を次々と提供し、人々はその華やかさを貪欲に追い求めるために、日々のエネルギーを費やしているようにも見える。このような風潮の所為か、高度経済成長期以降に生まれた人達は新しいもののみに、美し



道徳教育の手引き書「文化や伝統を大切にする心を育てる」(文部科学省の許可を得て複写・掲載)

さや価値を見出す傾向が強いように感じられる。しかし、低いレベルのコスト意識や利便性のみから生まれた、いわゆる経済合理性のうえに成り立つ製品は使い捨て思想の産物でもあり、作られた時点では新しく美しくても、表面的で軽薄なものに偏りがちである。日々、このような物に接し続けていると、知らず知らずのうちに本物を見分ける目がなくなり、ものを大切にしなくなり、資源を浪費し、環境に悪い結果を与えるようなことになりかねない。

もちろん、新しいことは美しいことの要素の一部である。しかし、このような美しさは表面的な性格が強い。年月を経て古くなり表面上は綺麗でなくても、内包するストーリーや、人間が手間ひまかけて生み出したもの、表面的ではない人間の営みの結果として引き継がれてきた古いものなど、文化財（歴史遺産）が秘めている価値を、美しいこと、素晴らしいこととして感じ取ることができる能力（感性）を子供に養わせることが、今一番必要なことではなかろうか。歴史教育がいろいろと取沙汰される中、このような視点でのものの見方の教育が考慮されるべきである。

文化財という言葉からは、世界遺産、国宝とか重要文化財、或いは指定文化財などが思い浮かび、何か非常に高尚な雰囲気とともに固く難しいイメージを連想しがちである。しかし、近年、登録文化財のように、われわれの普段の生活にかかわりの深い身近な文化財が増加してきた。このような中で、文化財を、大学や高等研究機関での研究対象としてのみではなく、子供にも理解できるように易しく噛み砕いた形の学習教材として小学校教育にも役立てたいと思う。それを通して、本物を見分ける能力、物事の本質の分かる能力を持った人間を育て上げることが出来ればと思う。

7.2 小学校への出前授業の進め

7.1 節で述べた文化財についての教育理念をわれわれが実現するための手段の一つとして小学校への出前授業（24、25）がある。小学校で授業をすると、「細かいものは何故しなやかなのか？」とか「輪ゴムが古くなると、引き伸ばしたときに、きっちりと元に戻らなくなり、そのうちに手に粘りつくようになり、最後はボロボロになってしまう。

これは何故か？」とか「ボールの弾むのとゴムの伸びるのはどうちがう？」といった物事の本質・根本原理にかかわる、よく観察し、よく考えた質問が出る。小学生は、鋭い観察力と豊かな感性をもって、いろいろなことを観察し、その結果を「不思議だな」、「何故だろう？」と思うことを通して物事の本質に迫ろうとする力や一般化の能力を養っているのである。これが中学校、高等学校と進むにつれて失われていくような気がしてならない。もしそうだとしたら、その原因が学校での学習と受験勉強を混同する社会の風潮にあることはほぼ間違いないと思う

が、ここで入試の弊害を嘆くよりは、人文、社会、自然科学の全ての分野に必要な鋭い観察力、豊かな感性、好奇心を、小学校時代に子供にしっかりと植えつける努力をする方がより建設的である。そのためには、筆者の一人（KH）の30年余りの経験では、学外の専門家による当該分野の根本原理を語る出前授業が極めて有効である。授業にかかわる分野の根本原理の教育は、本来、学校教育の通常の授業で行われるべきものであるが、これがいろいろな事情によって行い難くなっているからである（25）。



HKの小学校でのプラスチックの出前授業

ゆとり教育の見直しが取沙汰され、総合的な学習の授業が再検討されているが、自己の持つ知識を基にした自発的な問題発見と解決能力を養わせることを目的とする総合的な学習においては、教科書に触れられていない内容であっても、家庭・地域との連携のもとに、子供の感性を目覚めさせる教育が行える筈である。その重要な一つは、先人の足跡を理解し、未来への創造の糧となる、文化財に関わる学習であろう。学校現場における積極的な取り組みの期待される所であり、出前授業の格好の主題でもある。実際、6章に述べた「古い日本住宅に見られる生活の工夫」（17）の話を小学校ですると、次の7.3節に述べるように、かなりの生徒が昔の人たちがいろいろと工夫をしながら生きてきたことに興味を示してくれる。

精神性あるいは精神作用・心という観点から日本の歴史を振り返ると、その中の一つに仏教芸術に係る古代の仏像彫刻の鑑賞が思い浮かぶ。筆者たちの時代とは異なり、最近では修学旅行でも奈良や京都の歴史遺産を訪れることは少ないらしいが、たとえば奈良の東大寺などに残されているような天平期の彫刻などを的確な解説により仔細に鑑賞すれば、その作品の奥深さから、ヨーロッパの美術作品に勝るとも劣らない日本文化のすばらしさが、如実に理解されるはずである。次代を担う子供たちが、このようなことを体感しないまま成人する状況からは、国際社会を生き抜く日本人は生まれないと云わざるを得ない。

7.3 伝統的日本住宅による小学校教育の支援

伝統的な木造日本住宅は今の小学生からは遠い存在になりつつあるかもしれない。それでも、まだかなりの生徒が大黒柱を知っている。大黒柱という語が頼り甲斐のある人という意味を持っていることを知っている子供もいる。筆者の一人(KH)の家には大黒柱が2本あるという話をしたら、「大黒柱は1本のものと思っていたのに」と驚いてくれた子供が何人もいた。こんなとき、2本の大黒柱を教材にして、人間社会での協同・協調の精神や現代社会におけるπ型人間の必要性といった少々レベルの高い話をすることも可能である。

5章に述べた家やその中にある道具の話をしたときの感想文に、「昔の人はいろいろな工夫をしていたのだ」という感想とともに「昔の人もいろいろ工夫をしていたのだ」というのもあった。この助詞の「は」と「も」の違いは、科学・技術の進歩の中にどっぷりと浸かっている今の子供にどう対処すべきかという重要な問題を示唆している。「は」の方からは、「昔の人は一所懸命努力して工夫していたのだ、われわれも頑張らなければ」といったニュアンスが感じ取れるし、「も」の方は「これまで知らなかったけれど昔の人も工夫していたのだ」、という意味だと思われる。科学・技術の進歩が原因となって生まれた「理科離れ」というよりは「考え離れ」を解消する方法の一つになる「工夫する心」の重要性を子供に気付かせるのに、昔の人の工夫という歴史的事実が有効に作用していることがわかる。歴史の授業は昔のことを丸暗記するためのものではなく、今を生きる人間が未来を開くためにあるのだということを教えてくれる子供の感想である。古い民家は大人にも子供にも人間が生きるうえで大事なことを気付かせてくれる。

古い伝統的な日本住宅には、現在の機能的で無駄の無い住宅とは異なり、一見無駄とも思える部屋や何に使うのか分からない空間や道具が一杯ある。この様な無駄やゆとりが、子供の好奇心をはぐくみ育て、「何かがあるだろう、何かが起こるかもしれない」という知的興奮を引き起こす原点になる。言い換えると、古い木造住宅は日本人の精神活動の原点でもある（17、18）。小学校への出前授業で「頭を帽子をかぶるためではなくて、考えるためがあるのだ」という話をしたところ、一人の女生徒が「私は、いつも明日は何が起こるかなとわくわくしながら考えている」と言って、「いろいろなことを想像するのは新しいものを作る創造に通じるのだよ」と筆者が言うきっかけを作ってくれた。「風邪を引い

て昼間寝ているようなときに、じっと天井を見ていて、その木目をあれは鬼とか、これはライオンとか考えるのは面白いだろう」といったら「それぞれ」と先の生徒が応じてくれた（2、3）。一つとして同じ模様の無い木目のある天井の下で暮らせる子供は幸せである。そうでない子供にも同じような機会を与え、想像から創造に広がる世界に遊ばせることが、歴史のある伝統的日本人住宅に係わるものの使命の一つであろう。そして、教育基本法前文の「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」という崇高な精神の具現化を小学校で行うのに伝統的日本人住宅は格好の教材である。

7.4 科学技術の進歩と住育

子供の大部分が伝統的木造家屋に住んでいて、科学技術のレベルも今ほど高くなかった頃は、5章で述べたように、かまどや風呂焚きなどから化学的・物理的に工夫する心をごく自然に学ぶことが出来た。また、唐臼、竿秤、がんどうなどの先人の工夫の産物を見たり、実際に使ったりすることで、日々工夫する心だけでなく、物理学の根本原理さえ身につけられた。水道の無い家での風呂の水汲みや植木の水遣りからは単純作業を辛抱強くやる力を、また、個室の無い開放的な家からは社会性を養うことが可能であった。筆者らが子供のころ、敷居には神様が宿っているので踏んではいけないと厳しくいわれた。敷居は梁や鴨居と同様に木造住宅の構造上重要な横架材であり、これに体重をかけて撓ませるのは良くないという意味かもしれないが、そんな難しいことを子供には教えられないので、神様の頭を踏んではいけないという分かりやすい言葉で、子供に躰をしたのかもかもしれない。

古い日本住宅では、夏は明かり障子や襖を、細く削った竹や葦の茎を利用した簾障子に変える。風通しがよくなり、外部からの放射熱が遮られると同時に、その風景は日本の夏の情緒を醸し、精神的にも涼しさが強調されることとなり天然の冷房機となる。この簾障子を愛した人達には、いまの冷房機は実に勿体無いものに見えるかもしれない（17）。われわれの先祖は、この襖変えの習慣を、子孫にエネルギーの無駄使いを戒めるために遺してくれたともとれるし、このような衣替えの繰り返しを通して、季節の移ろいを鋭敏に感じ取る、日本人としての豊かな精神性が育ったともいえる。

また、伝統的木造住宅では、柱の根元は礎石に固定されていない。この浮動型の基礎の形式は、家の構造が耐え切れないような大きな地震が来たときに、柱脚が礎石からずれたり、浮き上がったりして、ゆれの強い力が直接家に伝わるのを防ぐといわれている。伝統的木造工法に見られる他のいくつかの柔構造とともに、未来の科学・技術の発展・深化のために、先人が残してくれた工夫とも言えよう。

伝統的木造住宅はその部材が人間と親和性の高い木であるということだけでなく、その構造やその中にある道具・工夫などが科学・技術の基本原則を伝えるとともに、その発展・深化を促す力を持っているのが特徴である。伝統的木造住宅が無くなるということは、学校の外での大事な教育の場が消えるということになる。起こしてはならないことの一つである。

8. 終わりに

太古に、人は自然そのものを生活の場にしてきた。文明の深化とともに、睡眠や食事、家族の団欒の場としての家が作られるようになり、住居が生活の場の中心となっていった。特に自然に恵まれ四季の移り変わりを愛でて、自然を日々の生活のあらゆるところに取り入れることを大切にしてきた日本人にとって、住居は自然と共生するものであり、自然と深いかわりを持ち、自然に開かれた存在の筈であった。さらに住居は、周囲の自然環境とともに地域社会と同調して町の景観を形作ってきた。

衣・食・住の中でも特に住には住環境という表現がよく使われる。環境とは「人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界、すなわち、自然的環境と社会的環境である」（26）という定義を採用すれば、建築は環境を強く意識したものでなければならず、動物である人間

の住環境は、自然や社会と密接な関連を持つものの筈である。

最近よく話題になる景観問題についても、人間の感覚に属する部分は多様であり科学的に定量化できない曖昧なものとする考えから、規制等による景観のコントロールは科学的手法には馴染まないと言わんばかりの主張までいろいろあり、その結果として自由という名のもとに猥雑な景観が放置されている。ましてやこのような状況を日本の戦後の経済発展と結びつけて、ダイナミックな姿と評価する論評のあることはいただけない。

また、戦後の我が国の建築の世界では、住宅の一部も含めて、経済性のみを前面に押し出したようなモダニズム建築様式が席卷し、この様式に従うことが建築・デザインを展開するうえで最も重要なこととされ、これが現在も続いている。しかし、このような様式は、科学的思考の中の重要な一つである感性という人間の精神作用からくる部分を過小評価し、経済合理性の中で機能のみを強調するものである。その結果として生み出された形は、伝統的な日本建築に存在する一見無駄とも思えるような部分を切り捨てて、箱形で、竹山清明氏の言う“大衆化したモダニズム建築”(27)を出現させている。人間の感覚的な部分に共鳴して人間の創造性の糧となる大事な部分を切り捨てた、このような建築は人間を取り巻く環境物件として優れたものとはいえない。

今、感性的な形容詞の一つである「美しい」に関連して美しい国づくりが提唱されている。そのためには、現存する文化財、特に歴史的建造物を正しく評価することを通して、わが国の歴史と文化をよく理解することが必要である。「美しい国」とは、景観と人の心の両方が美しい国を意味する。アインシュタインが1922年(大正11年)に日本に一ヶ月余り滞在して帰国する際に、朝日新聞に、「滞在中特に感じたことは、地球上にもまだ日本国民のごとく謙譲にして且つ篤実の国民が存在していることを自覚した点である」、また、「日本の山水草木は美しく、日本家屋も自然に叶い独特の価値があるので、日本国民が欧州感染をしないように希望する」という謝辞と希望を寄せたということである(28)。アインシュタインは日本全体を世界の文化財と感じ、それを伝承する日本国民にエールを送ったのだと思う。アインシュタインの11年後に来日し、日本で3年半を過ごしたドイツの建築家ブルーノ・タウトも、桂離宮を訪れた時、「それは実に涙ぐましいまで美しい」と述べたといわれる(29)。

多くの日本建築や伝統芸術に触れるとともに広く文化人達を歴訪し、独創的な著述、講演などを通して日本文化の評価・紹介につとめたタウトが日本を去るにあたって残した言葉「われ日本文化を愛す」(Ich liebe die Japanische Kultur)が、群馬県高崎市少林山達磨寺境内の石碑に刻まれている(29,30)。彼らの思いに応え、住育によって日本の文化の深化に貢献することが伝統的日本住宅にかかわるものの使命と筆者らは考えている。また、4.5節にも述べたことであるが、われわれの現在の文化を担いそれを未来に伝えることの出来る伝統的日本住宅を残し伝えると同時に、モダニズムを凌駕する新しい平成の建築を生み出すことも忘れてはならない。



桂離宮



タウトが3年あまり滞在した洗心亭
少林山達磨寺提供

9. 参考文献

- (1) 一色史彦、住まいの文化—川は流れている
<http://www32.ocn.ne.jp/~kokentik/sumai/culture1.html>
- (2) 畑田耕一、林義久、文化伝承の教室としての伝統的日本住宅—「住育」の大切さ、大阪府登録文化財所有者の会ホームページ文・随想欄<http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/bun5.html>
- (3) 畑田耕一、林義久、建築と社会、2006年5月号
- (4) 畑田耕一、建築医、8、56-57、(2000)
- (5) 緒方淳子、「子供たちの眼に輝きを」—畑田塾の更なる発展を願って—、畑田家住宅活用保存会年報、第6号、(2007) p. 8 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/nenpo6.pdf>
- (6) モダニズム様式とは、歴史的様式の装飾的な部分を全面的に否定して20世紀初頭に生み出された新しい建築様式である。資本主義的な生産の発展に適合する効率的な建築設計・生産のありかたの追求の中で生み出され、現代の主要な建築のつくりかたとして、アジアやアメリカなどを中心に定着している。参考資料：竹山清明、「生産性第一のモダニズム建築デザインの問題点と発展の方向性」、建築とまちづくり、No.351 (2007) p. 22
- (7) 畑田家住宅活用保存会ホームページ <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/>
- (8) 泉南市ホームページ <http://www.city.sennan.osaka.jp/~maibun/bunkazai/yamadake.htm>
- (9) 山田亨、登録有形文化財を守りたい！—我が家の奮戦記、大阪府登録文化財所有者の会ホームページ一文・随想欄 <http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/bun8.html>
- (10) 泉佐野市ホームページ <http://www.city.izumisano.osaka.jp/section/rekishi/minka.html>
- (11) 児山万珠代、「つくる」ことを楽しむ「ナヤ・ミュージアム」、大阪府登録文化財所有者の会ホームページ一文・随想のページ <http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/bun11.html>
- (12) 大河直躬、『歴史ある建物の活かし方』出版記念シンポジウム（歴史ある建物の活用に向けて）—これからの活用— <http://www.gakugei-pub.jp/kanren/rekisi/semi05/02-5.htm>
- (13) 歴史ある建物の生かし方、清水真一・蓑田ひろ子・三船康道・大和智 編、(1999) 学芸出版社 ISBN4-7615-3079-0 <http://www.gakugei-pub.jp/kanren/rekisi/semi05/index.htm>
- (14) 畑田 弘美、音楽空間としての畑田家住宅、畑田家住宅活用保存会年報、第4号、5ページ
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/nenpo4.pdf>
- (15) 隈研吾 「負ける建築」(2004) 岩波書店
- (16) 畑田耕一、林義久、大阪府の登録有形文化財概要、大阪府登録文化財所有者の会ホームページ一文・随想欄<http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/bun2.html>
- (17) 畑田耕一、古い日本住宅に見られる生活の工夫、(2004)、出版 畑田家住宅活用保存会、ISBN4-903247-01-5、<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/shuppan-2.pdf>
- (18) Koichi Hatada ,Ingenious Ideas Seen in Ancient Japanese Homes, (English translation by Eri Ichikawa) <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/shuppan-2-eng.pdf>
- (19) 早稲田大学尾島俊雄研究室PRH研究会、富山プロジェクト
<http://www.ojima.arch.waseda.ac.jp/~prh/toyama/index.html>
- (20) ワンガリ マータイ 著、福岡 伸一 訳、モットイナイで地球は緑になる、(2005)、出版 木楽舎
- (21) 田中耕一、ノーベル化学賞受賞記念講演会、

<http://www.nedo.go.jp/nano/nanotech/tanaka.html>

(22) 畑田耕一、林義久、登録文化財の活用保存と学校教育、大阪府登録文化財所有者の会ホームページ一文・随想欄、<http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/bun1.html>

(23) 文部省、「小学校 文化や伝統を大切に育てる」道徳教育推進指導資料（指導の手引き）7 平成11年

(24) 畑田耕一、小学校への出前授業の楽しみ—頭は帽子をかぶるためではなく考えるためにある、畑田家住宅活用保存会ホームページ一文・随想欄

<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun5.html>

(25) 畑田耕一、渋谷 亘、矢野富美子、これからの日本の教育、畑田家住宅活用保存会ホームページ一文・随想欄、<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun19.html>

(26) 広辞苑、(1998)、岩波書店

(27) 文献6に記載した論文の中で竹山清明氏は、もう一つのモダニズム建築・現代建築として、ル・コルビュジェらのモダニズム様式やその後の現代建築様式を安易に真似て建設された私たちの身の回りにある大量の建築物を、“大衆化したモダニズム建築”と呼んでいる。

(28) 朝日新聞 2005.4.16 朝刊「天声人語」

(29) 「ブルーノ・タウトとは」、ブルーノ・タウトの会ホームページ、

<http://www.brunotaut.com/taut.html>

(30) 「ブルーノ・タウトの映像を作る会」活動報告、<http://www.daruma.or.jp/taut/bruno2.html>